

# 首里城跡

## —美福門磴道地区発掘調査報告書—

令和2(2020)年 2月

沖縄県立埋蔵文化財センター



## 序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成30年度に実施した首里城跡美福門礎道地区の発掘調査成果をまとめたものです。

今回の調査区は、平成9年度調査区の二階殿地区と、平成26年度調査区の継世門北地区の間に位置します。この一帯は、尚巴志王代（1422～1439年）の創建とされ、かつては首里城の正門であったとも伝えられる美福門と、門から南東方向に延びる階段があった場所で、過去の調査でもそれらに関連する遺構を部分的に確認していましたが、今回の成果を加えることにより、美福門及びその一帯の全容を把握することができました。

また本報告書では、今回と過年度の成果を一体的に検討することで、かつての成果の見直しに加え、当該地区における遺構や土地利用の変遷の一端も窺い知ることができます。

首里城は昨年の火災で甚大な被害を受けましたが、現在は再建や復興に向けて関係機関の取り組みが進められています。本報告書が、上記の目的はもちろん沖縄の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、地域における文化財の保護のために役立てば幸いです。

最後に、様々なご指導・ご助言・ご協力を頂きました諸機関及び関係各位に心から感謝申し上げます。

2020(令和2)年2月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 城田 久嗣



## 例　　言

1. 本報告書は、国営沖縄記念公園首里城地区の整備に伴い、沖縄県那覇市首里当蔵町所在の「史跡首里城跡」美福門遺道地区で実施した発掘調査及び資料整理の成果をまとめたものである。
2. 本業務は、内閣府　沖縄総合事務局　国営沖縄記念公園事務所が沖縄県と委託契約を交わし、沖縄県教育庁文化財課の指導のもと、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は平成30年度に実施し、資料整理及び報告書作成は令和元年度に実施した。
4. 本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第XV座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。ただし、報告書抄録の緯度経度は世界測地系に変換している。
5. 発掘調査及び資料整理に際して、以下の諸氏や機関に協力・指導・助言等を戴いた。記して謝意を表する。  
(五十音順、敬称略　※所属名は当時)  
浅野 啓介（文化庁記念物課）、平良 啓（株式会社国建）、高良 倉行（株式会社真南風）、  
森 達也（沖縄県立芸術大学）、首里城研究会、首里城復元検討委員会
6. 本書の編集及び執筆は、当センター職員の協力を得て新垣力が行った。
7. 本書に掲載した発掘調査状況の写真は、新垣力・中山晋・金城貴子が主に撮影した。
8. 発掘調査で得られた実測図及び写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

# 目 次

序

例言

<b>第1章 経緯と経過</b> .....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査・整理の体制.....	1
第3節 調査・整理の経過.....	2
<b>第2章 遺跡の位置と環境</b> .....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
<b>第3章 調査の方法と成果</b> .....	10
第1節 調査の方法.....	10
第2節 遺構.....	10
<b>第4章 総括</b> .....	19

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 作業状況.....	2	第12図 平面図1 .....	12
第2図 沖縄県の位置.....	3	第13図 平面図2(オルソ画像) .....	13
第3図 首里城跡の位置と周辺の遺跡.....	6	第14図 平面図3(立面図・断面図ライン入り) .....	14
第4図 首里城跡の史跡指定範囲と調査区.....	6	第15図 立面図1(蹴上1) .....	15
第5図 首里城絵図にみる調査区.....	7	第16図 立面図2(蹴上2) .....	16
第6図 首里古地図にみる調査区.....	7	第17図 立面図3(階段西側)断面図 .....	17
第7図 沖縄県首里旧城図にみる調査区.....	8	第18図 立面図4(階段東側・東側石積み) .....	18
第8図 旧首里城熊本鉄台沖縄分遣隊配置図にみる調査区 .....	8	第19図 遺構図と横内図の合成 .....	20
第9図 旧首里城図にみる調査区.....	9	第20図 遺構図と阪谷図の合成 .....	21
第10図 旧琉球大学校舎配置図にみる調査区.....	9	第21図 遺構図と整備設計図の合成 .....	22
第11図 美福門礎道地区の位置.....	11	第22図 遺構の変遷 .....	23

## 図版目次

図版1 首里城跡空撮写真1 .....	27	図版7 平成26年度遺構検出状況2(羅世門北地区2) .....	33
図版2 首里城跡空撮写真2 .....	28	図版8 平成26年度遺構検出状況3(羅世門北地区3) .....	34
図版3 調査区近景・遠景 .....	29	図版9 平成9年度遺構検出状況1(二階殿地区1) .....	35
図版4 遺構検出状況1 .....	30	図版10 平成9年度遺構検出状況2(二階殿地区2) .....	36
図版5 遺構検出状況2 .....	31	図版11 平成9年度遺構検出状況3(二階殿地区3) .....	37
図版6 平成26年度遺構検出状況1(羅世門北地区1) .....	32	図版12 平成9年度遺構検出状況4(二階殿地区4) .....	38

# 第1章 経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

首里城跡の復元整備は、沖縄県本土復帰の年である昭和47（1972）年に、沖縄県教育庁文化課（以下、文化財課）が戦災文化財復元整備事業として歓会門及び周辺城壁の整備に着手したことを嚆矢とする。その後、沖縄戦後に建設された琉球大学の移転に伴い、跡地利用法として首里城一帯の公園化が有力となつたため、これまでの城門や城壁に加えて、正殿などを含む城郭内側区域の本格的な復元整備を行う気運が高まつた。国も昭和57（1982）年に決定した第二次沖縄振興開発計画の中で、「首里城跡一帯の歴史的風土を生かしつつ、公園としてふさわしい範囲について整備を検討する」と提言し、それを受けて沖縄県土木建築部は昭和59（1984）年に復元整備の指針となる「首里城公園基本計画」を策定した（首里城公園基本計画調査委員会 1984）。そして昭和61（1986）年度に首里城跡の内郭を国営公園として整備する方針が閣議決定されたことに伴い、翌年度から復元整備に必要な遺構確認及び情報収集を目的とした発掘調査が開始された。ちなみにこの発掘調査は、史跡首里城跡整備委員会で示された「事前の発掘調査に基づく復元整備を行うこと」との基本的条件に基づいている（史跡首里城跡整備委員会 1998）。

今回の対象となる美福門砲台地区は、平成9（1997）年度調査区の二階殿地区（沖縄県埋文2005b）と、平成26（2014）年度調査区の繼世門北地区（沖縄県埋文2018a）の間に位置する。平成30（2018）年6月、内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所（以下、公園事務所）による当該地区的整備工事中に未調査の遺構が発見された。その取扱いについて文化財課と公園事務所が調整した結果、工事前に発掘調査を実施することとなり、同年12月に公園事務所長と沖縄県知事間で「首里城地区（美福門砲台エリア）発掘調査業務」の契約を締結し、平成31（2019）年1月に現地調査を開始した。

## 第2節 調査・整理の体制

本業務は、これまで実施してきた国営公園整備に伴う事前調査と同じく主管課である文化財課が事務調整及び指導を行い、当センターが平成30年度に発掘調査、令和元年度に資料整理の実務を担当した。体制の詳細は下記の通りである。

### 発掘調査（平成30年度）

事業主体：沖縄県教育委員会 教育長 平敷昭人

事業主管：沖縄県教育庁文化財課 課長 濱口寿夫

記念物班 班長 仲座久宣

指導主事 山田義尚、主任 宮城淳一

事業所管：沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 登川安政

総務班 班長 比嘉智博

主事 當山彬

総括…調査班 班長 中山晋

発掘調査担当…主任専門員 新垣力

発掘調査補助…主任専門員 片桐千亞紀、主任 金城貴子

写真測量業務委託 有限会社ティガネー

### 資料整理・報告書作成（令和元年度）

事業主体：沖縄県教育委員会 教育長 平敷昭人

事業主管：沖縄県教育庁文化財課 課長 濱口寿夫

記念物班 班長 仲座久宣

指導主事 山田義尚

事業所管：沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 城田久嗣

総務班 班長 池田みき子

主任 當山彬

総括…調査班 班長 中山晋

資料整理担当…主任専門員 新垣力

埋蔵文化財資料整理員及び協力者

安里メグ、嘉数渚、儀間真章、仲間文香、宮城かの子

### 第3節 調査・整理の経過

#### 発掘調査

現地作業は平成31（2019）年1月7～16日の期間で実施した。遺構は既に露出していたことから、7日に遺構の精査・座標標定・写真撮影を行い、8～15日にオルソ図面を作成し、16日に現地での確認を実施して全ての作業を終了した。



遺構精査及び清掃



座標標定



写真撮影

第1図 作業状況

#### 資料整理・報告書作成

令和元年8月20日、公園事務所総務課長と沖縄県知事間で「令和元年度首里城地区（美福門砦道エリア）発掘調査報告書作成業務」の契約を締結し、資料整理を本格的に開始した。今回の発掘調査では遺物が出土していないことから、遺構図面及び写真的な整理が主体となった。特に今回調査区は、二階殿地区と繼世門北地区に挟まれている関係上、両地区の成果と整合させる作業に時間を割いた。具体的な内容は、今回の成果と繼世門北地区検出の砦道遺構図及び二階殿地区遺構全体図を合成しての製図だが、二階殿の図面は全てアナログデータのため最初からデジタルトレースを行う必要が生じた。加えて、両地区には今回の調査成果を理解するうえで必要な写真も複数確認されたため、それらの整理や抽出もあわせて行った。

上記の作業にはパソコンの作図ソフト（Illustrator）を用いてのデジタルトレースやレイアウトを行い、その後は文字原稿や写真も含め編集ソフト（InDesign）を用いてDTP印刷用の編集を実施し、最終的には全てPDFファイルに変換して印刷製本業者へ入稿した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

那覇市は東方分水界付近に広がる標高数10m～120mに達する台地と、港に面する沖積低地とに代表される対照的な地形を示している（古川・高里 1989）。首里城は那覇市の東側、首里当蔵町3丁目1番地に所在し、首里台地と称される標高100m前後の琉球石灰岩丘陵上に築かれた県下最大規模のグスクで、東西410m、南北273m、面積46,167m<sup>2</sup>を誇る。東側に那覇市の最高所（標高165.7m）である弁ヶ嶽がそびえ、多くの河川が首里城を取り巻くように配されるなど、優れた風水思想に基づいた王都に相応しい環境が整えられている。この丘陵の南側には、安里川の浸食により比高差70～80mの比較的急な斜面が形成され、地形を利用した掘り込み式の古墓が点在している。

首里城周辺の地質の特徴として、前述した琉球石灰岩の下層に新第三紀鮮新世の砂岩・泥岩からなる島尻層群が基盤となっている点が挙げられる。不透水層である島尻層群の上に、スポンジ状の構造で高い透水性を有する琉球石灰岩が重なることにより、首里の各地では両者の不整合部分からの湧水が多数確認されている。城内の龍蟠や寒水川樋川もこれに由来するものである（角田 2014）。

首里城の基盤層も上記の例に漏れず、琉球石灰岩や赤土（島尻マージ）と島尻層群に大別されるが、今回調査区の「美福門礎道地区」については、琉球石灰岩を基盤層を持つことが発掘調査で判明している。

### 第2節 歴史的環境

現在のところ、首里城の創建について明確に触れている史料は確認されていない。察度43（1392）年に察度王が建造したと伝わる数十丈の高樓（高世層理殿）を首里城内の施設とする説もあるが、より信頼性の高いものとしては『安国山樹華木之記』が挙げられる（沖縄県文化課 1985）。尚巴志6（1427）年に建立されたこの碑文には、首里城北西側で人工池の龍潭を掘り安国山に華樹を植えたとの記述がみられるため、尚巴志王代（1422～1439年）に周辺の整備を行えるような状況であったこと、つまり当該期に王城としての基本的な構造が確立していた可能性は高い。そして尚真・尚清王代（1477～1555年）には外郭の拡張や周辺施設の整備が進み、現在のような姿に近づいていったと推定される。

今回調査区の「美福門礎道地区」は、かつて「美福門」が存在した場所に隣接する。美福門は内郭城壁に付随する門の一つで、内郭城門のうち最大の規模を有する。切石積みの門口の上に木造檜を架け渡す内郭城門共通の構造で、入母屋造り・本瓦葺きの檜の正面中央に「美福」の字を掘った扁額を掲げていた。門前には瑞泉門と同じく一对の石獅子像が設置され、そこから礎道とも称される幅広で急勾配の石段が延びていた。創建年代は文献などにみられないが、伝承によると尚巴志王代（1422～39年）に開かれたとされ、かつて正殿が南面していた古い時代の正門であったとも言われている（真栄平 1997、久手堅 2000など）。ちなみに、『李朝実録』世祖8（1462）年の記事では漂流民梁成等が漏刻器の設置された南門を目撃しており、同年記事にある琉球側使臣との問答では、「紫宸」と呼ばれる正門の存在を明かしている（池谷・内田ほ



第2図 沖縄県の位置

か 2005)。これらの記述は瑞泉門または美福門を指すとの説があり (高良 1996)、また伝承と類似する部分もみられるため、今後多方面からの更なる検討が必要であろう。その他、グスク時代における美福門の様相は判然としないが、尚泰 4 (1851) 年には首里城周辺を徘徊する異国人の侵入対策として、淑順門などとともに二重扉が設置された (球陽研究会 1974)。

美福門は、赤田に面することから「赤田御門」、門の奥が御内原であることから「みもの御門」、門前にある一対の石獅子像から「シーサー御門」など様々な俗称がみられる (新崎 1956、首里城研究グループ 1997、久手堅 2000)。このうち「赤田御門」は、『おもろさうし』巻五に「きこへ、あちおそいきや、あかた、ぢやは、あけわちゑ、かみ、てたの、そろて、ほこり、よわちへ又 とよむ、おちおそいきや、すへの、ちやは、あけわちへ」と謡られており、また「すへのちやう (すへの御門)」とも呼称されたことが窺える (外間 2015)。ちなみに「赤田御門」は、美福門の外側に雜世門が創建されて以降は雜世門の俗称となつた。一方「みもの御門」の名称は、御内原に召された妻を恋い焦がれた夫の心情を現したとされる琉歌「赤田門やつまるとも恋しみもの門やつまつてくいるな」(島袋 1964) にもあるように、当初普通名詞であったものが、時代の変遷で固有名詞化したものと考えられる (久手堅 2000)。

隣接する場所では、これまで平成 5 (1993)・6 (1994) 年度の東のアザナ地区 (沖縄県埋文 2004)、平成 8 (1996) 年度の大台所・料理座地区周辺 (沖縄県埋文 2015)、平成 9 (1997) 年度の二階殿地区、平成 26 (2014) 年度の雜世門北地区で発掘調査が実施されている。そのうち、東のアザナ地区と雜世門北地区では美福門の城壁や基礎・礎道及び石獅子像台座が検出されているが、大台所・料理座地区周辺と二階殿地区では該当遺構は確認されていない。これらの内容は、今回の調査成果とあわせて美福門及び礎道を理解するために重要な資料であるだけでなく、今回調査区の西側や南側が後世に著しい改変を受けた可能性も示唆している。

上記のように、これらは首里城内の重要施設として、琉球国が存続する間は適切な管理のもとに機能を維持してきた。しかし、明治 12 (1879) 年に沖縄県の設置及び琉球王府の解体が断行されると、首里城も歴史の荒波に翻弄されていく。まず、琉球処分の同年から首里城に駐屯した熊本鎮台沖縄分遣隊 (以下、分遣隊) は、城内の建物や石垣などを各所で改変した。この頃首里城は建物・土地とも陸軍省の管轄となり、軍事施設であった同所へは関係者以外容易に立ち入ることができなかつたため、分遣隊が撤退する明治 29 (1896) 年までの間に城内がどのように改変されたか、その詳細は現在も判然としない。しかし、美福門及びその周辺は幸いにも主要施設として使用されなかつたとみられ (法大沖縄文化研究所 2014 など)、当該期における目立った改変はないと思われる。特に美福門は、分遣隊駐屯時の明治 21 (1887) 年に洋画家山本芳翠の描いた『琉球中城之東門』が往時の姿を表したものとされており (高階 1998、宮内庁三の丸尚蔵館 2001)、これによると美福門は同年段階で櫓の残存が確認されるものの、門前は石獅子像が 2 基とも消失し台座のみになっていたことが理解される。

分遣隊が撤退した明治 29 (1896) 年以降、首里城は学校や役所施設として使用されるようになる。同年 11 月から翌年 9 月まで沖縄県師範学校が城内の建物を仮校舎として使用したのを契機に、師範学校附属小学校の移転 (明治 31 年 4 月～翌年 4 月)、沖縄県臨時土地整理局の設置 (明治 33 年 8 月～同 37 年 3 月 3 日)、校舎火災に伴う沖縄県師範学校の再移転 (明治 37 年 1 月 14 日～同 41 年 7 月)、首里区立工業徒弟学校の移転 (明治 37 年 4 月～大正 7 年 1 月)、首里区立女子工芸学校 (以下、工芸学校) の移転 (明治 41 年～昭和 9 年)、首里尋常高等小学校五学年三学級の移転 (明治 42 年 4 月～同 45 年 4 月)、沖縄県立中学校分校の設置 (明治 43 年 4 月～翌年 4 月)、首里尋常高等小学校三年以上高等科まで 14 学級の移転 (明治 44 年～翌年 4 月)、首里女子尋常高等小学校分教場の移転 (明治 45 年 4 月～) などが確認されている。この頃、美福門は明治 41 (1908) 年の工芸学校の移転に伴い、管理の都合で閉ざされることになった。しかし閉鎖といっても門口を高さ 1 m 程度の石積みで塞いだだけであり、昭和 7 (1932)・8 (1933) 年頃には再び開かれたとされる。また同時期に、首里区は首里城の建物及び敷地の払い下げ

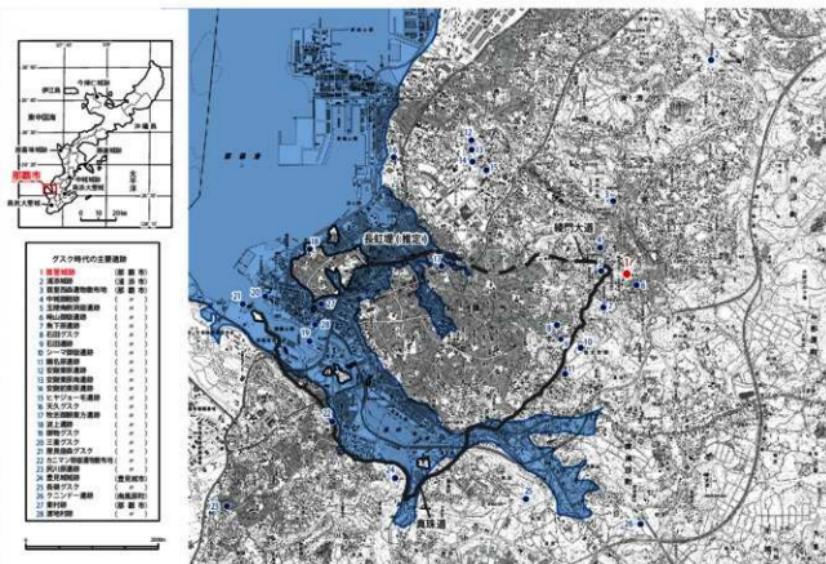
を願い出していた。最初は明治 36（1903）年で、「城内の建物一切を相当価格、地所は無償」という内容を陸軍省に依頼したが、希望は叶わず相当年限貸し付けという形になった。地所については、明治 37（1904）年 4 月～昭和 9（1934）年 3 月までの満 30 ヶ年間公園敷地としての無償使用が可能になったが、明治 42（1909）年に建物も含めて再度依頼したところ許可され、建物は合計 887 円 30 銭、地所は 1,054 円 55 銭で払い下げられることになった。このうち、美福門は坪数 7 坪 1 合 4 勘で払い下げ価格 71 銭 4 勘となっている。ただし、当該期における美福門の全体像については不明な点もあり、明治初期作成とされる沖縄県首里旧城図（平良 1994、以下横内図）と、明治 43（1910）年にアメリカ自然史博物館学芸員の R.C. アンドリュースが撮影した写真（宇仁・当山ほか 2014）には櫓が確認できるものの、昭和 6（1931）年頃作成の旧首里城図（以下阪谷図）だと両側の城壁のみが描かれている。このため、美福門は払い下げ時に存在していた櫓が、昭和 6 年頃までに何らかの理由で消失したものと考えられる。

その後、正殿は大正 15（1925）年国宝に指定され、昭和 9（1934）年 3 ～ 4 月頃には解体修理が落成し、往時の威容を幾分か取り戻すのだが、戦争の時代に突入していたこともあり、首里城はまたも軍隊の駐屯地となった。昭和 19（1944）年、城内にあった首里第一国民学校校舎の一部を第 9 師団（武部隊）が兵舎に使用したのを皮切りに、南風原から移動してきた第 32 軍司令部が地下に壕の構築を開始した。その影響も手伝ってか、翌年には米軍の砲撃を浴びて灰燼に帰した。他の施設も大半が同様に焼失したと考えられるが、美福門は昭和 20（1945）年 6 月 18 日撮影とされる写真を確認すると、大破しているのは門から東西に延びる城壁の一部で、門口の石積みや門前の礎道が概ね良好な状態で残存していることから（首里城復元期成会ほか 1987）、少なくとも美福門一帯に関してはそれほど戦災を被っていないとみられる。

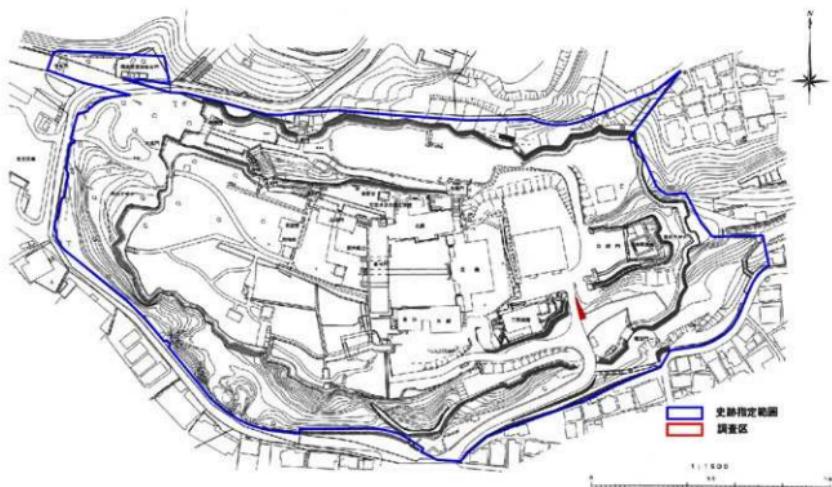
戦後、跡地には昭和 25（1950）年に琉球大学が開学した。その際、校舎などの建設に伴う大規模な掘削及び土砂移動が行われ、一帯は旧地形の面影がわずかに偲ばれる状態にまで変貌を遂げた。この影響は今回調査区にも及んでおり、隣接する維世門北地区と同様昭和 40（1965）年度に完成した農学ビル（琉大二十周年記念誌編集委員会 1970）に伴う工事により、一帯の南側を基盤層ごと削平している状況が維世門北地区的発掘調査で確認されている。この状況は、昭和 30（1955）年に琉球政府指定史跡となって以降も特に変化はなかったが、昭和 47（1972）年の沖縄県本土復帰時に国の史跡に指定されてからは、同年より戦災文化財復元整備事業で城門や城壁の修復が開始され、また昭和 59（1984）年に琉球大学の移転が完了した跡地を公園用地にすることが決定して以降、今まで国営公園及び県営公園事業に伴う復元整備が進められている。そして平成 12（2000）年には、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として玉陵・園比屋武御嶽石門・今帰仁城跡・座喜味城跡・勝連城跡・中城城跡・識名園・斎場御嶽の 8 件の資産とともに、日本で 9 件目の世界文化遺産に登録された（沖縄県文化課 2001）。

現在、首里城公園は平成 29（2017）年度実績で 2,857,390 人が訪れており、平成 30（2018）年 12 月 16 日には開園から数えて入園者 6,000 万人を達成している。また平成 31（2019）年 2 月 1 日には今回調査区を含む御内原エリアも公開され、県内有数の観光地として沖縄県の経済を牽引する存在であったが、令和元（2019）年 10 月 31 日未明に起きた火災により主要建物群が著しい被害を受け、特に木造復元された正殿建物の焼失は国内外にも大きな衝撃を与えた。

平成 4（1992）年 11 月 3 日に一部開園してから約 27 年間、沖縄県の象徴的な存在となっていた首里城の火災は県民を深い悲しみに包んだ。しかし、罹災直後から全国各地より多額の募金や義援金が届けられ、沖縄県は同年 11 月 18 日に知事直轄の「首里城復興戦略チーム」を発足させた。国も 11 月 6 日から「首里城復元のための関係閣僚会議」を開催し、内閣府沖縄総合事務局に有識者会議の設置、再建に向けた基本方針、次年度沖縄振興予算へ首里城復元関連費用の計上などを決定している。また那覇市も、12 月 24 日に全庁対応型の「那覇市首里城復旧・復興関連対策推進会議」を設置するなど、首里城の再建及び復興に向けた各方面的動きが加速している。



第3図 首里城跡の位置と周辺の遺跡（薄いトーンは15世紀前後の海岸線を想定）

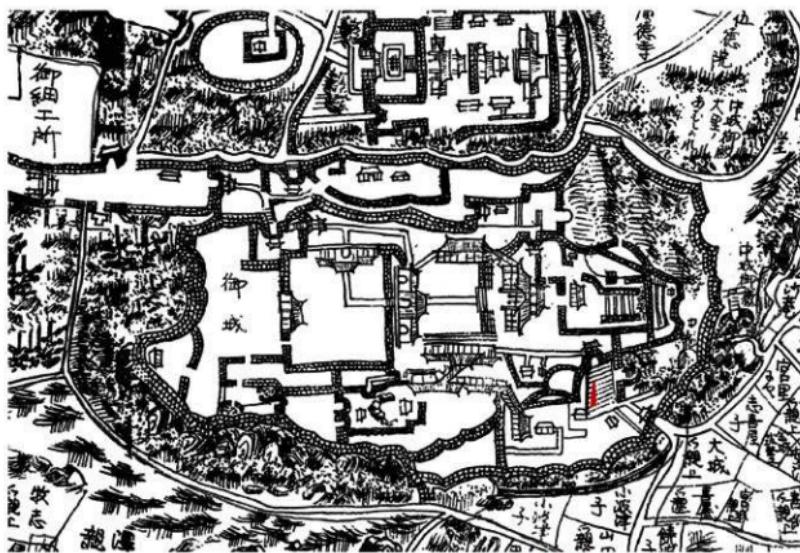


第4図 首里城跡の史跡指定範囲と調査区



第5図 首里城絵図にみる調査区

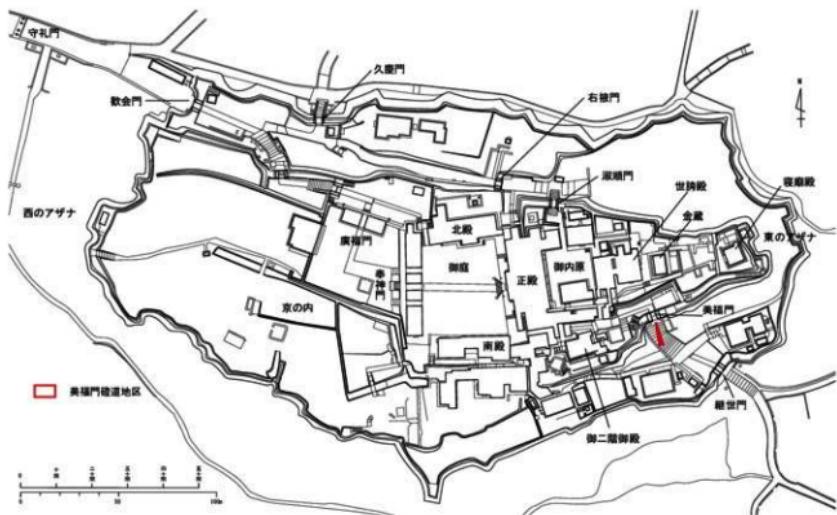
※17世紀後半～18世紀前半作成（東京大学史料編纂所蔵）



第6図 首里古地図にみる調査区

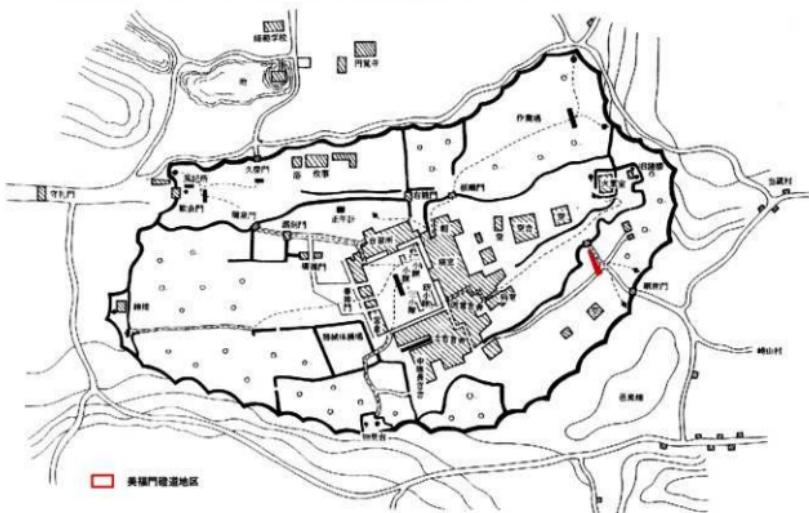
※18世紀初頭作成（沖縄県立図書館蔵）

□ 勿羅門禮道地区



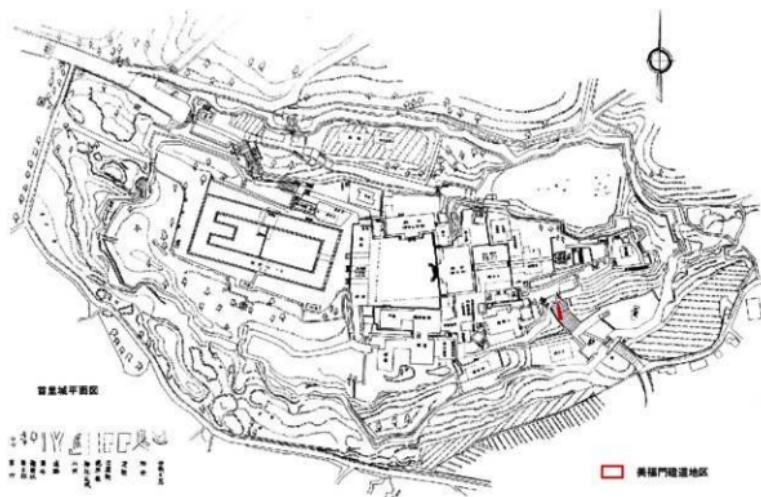
第7図 沖縄県首里旧城図にみる調査区

※明治初期作成（那覇市歴史博物館蔵、原図をトレース）



第8図 旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図にみる調査区

※明治中期頃作成（沖縄県教育庁文化財課史料編集班蔵）



第9図 旧首里城園にみる調査区　※昭和6年頃作成（沖縄県立図書館蔵）



第10図 旧琉球大学校舎配置図にみる調査区　※1950～1984年作成

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

今回の発掘調査は国営公園整備に先立つ遺構確認を目的とするもので、約30m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査区では既に遺構が露出した状態であったため、写真測量による遺構の記録のみを行った。作業の内容は、遺構の精査と清掃を終えた後に、デジタルカメラで撮影した写真からオルソ画像を作成し、その画像をトレースして図化するものであるが、オルソ画像作成や図化の際には維世門北地区におけるデジタル写真測量の成果も利用しながら実施した。

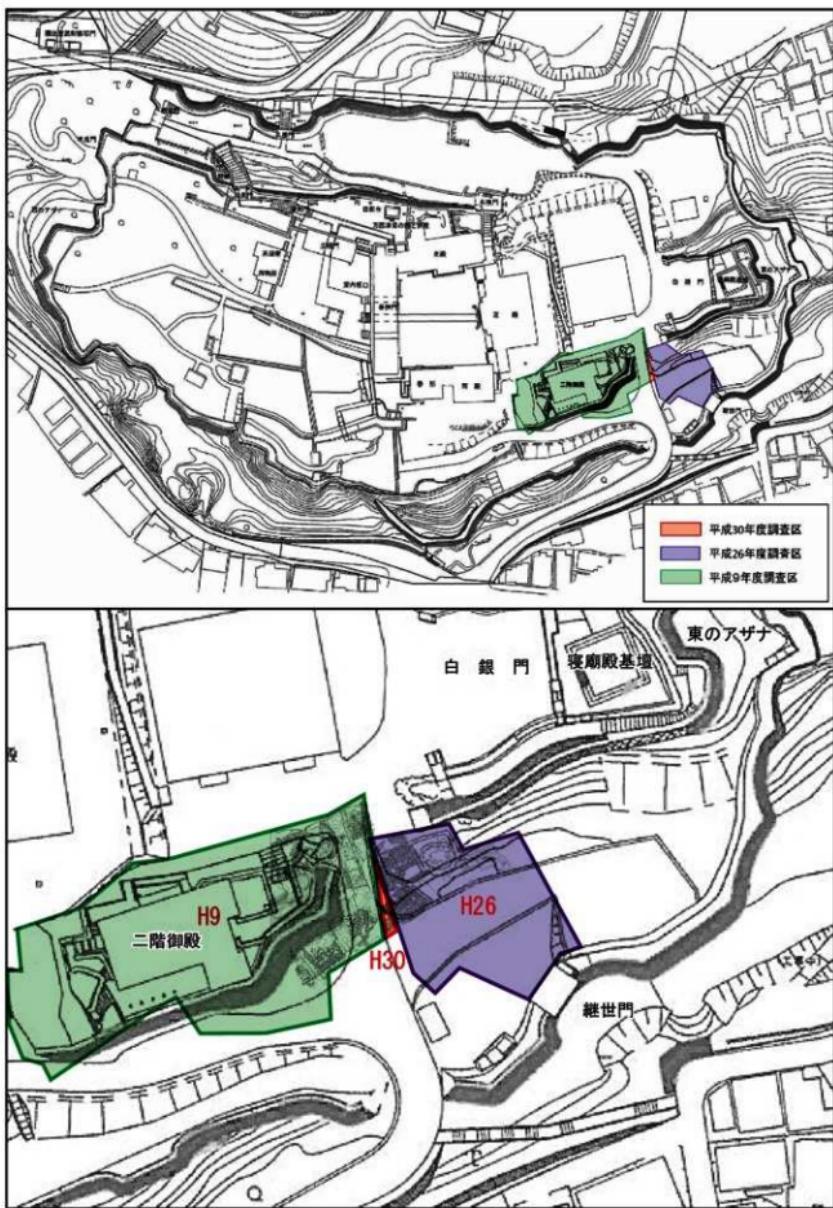
### 第2節 遺構

今回検出された遺構は、美福門から南東方向に延びる石造りの階段である（第10～16図）。この階段は「礎道」とも称されるもので、緩やかに傾斜する幅広の踏面と、高い蹴上という独特の形態を有している。かつて北隣の東のアザナ地区や東隣の維世門北地区で1段～14段を確認したが、今回の調査では10段～13段の西側延長部分に加え、12段と13段の西端で側面と思われる箇所も検出した。以下、過年度の成果とあわせて詳細を記す。

階段の平面形は、維世門のある南東方向に向かってわずかに開く長方形を呈するが、9段で東側に15°屈曲しており、幅員は12段と13段の西端部分を側面と仮定した場合約8.4mを測る。踏面は石畳で、長さ20～40cm前後で略方形の平滑な石材を敷き詰め、その南端に高さ25～30cm・長さ20～40cm前後の長方形の石材を据えて蹴上を設けている。踏面・蹴上とともに石材の表面は摩滅しており、長期間使用されたことが窺える。踏面の奥行は約1.0～1.2m、傾斜は約10～15°を測り、踏面1段目の上面のみに石獅子像の台座を構成する石列が配置される。段数は14段までの東側が確認されているが、14段目までの西側と15段以降は琉球石灰岩の基盤層ごと削平されており、旧琉球大学の建物建設に伴う造成で破壊されたと考えられる。また破壊された箇所と12段及び13段の西端の観察から、琉球石灰岩の基盤層を加工して土を入れ、その上に石材を敷設するという階段の構築方法も判明した。

階段の東端には、9段までは平場が隣接するが、10段より南側では石積みが隣接する。この石積みは長さ20～30cm前後の略方形の石材を乱雑に積み上げたもので、天端の形態は不明ながら残存高は西側で階段の踏面より約30cm、東側で遺物法含層から約60cmを測る。階段に隣接及び並行して延びているため、階段の15段以降は琉球石灰岩の基盤層ごと削平されており、やはり旧琉球大学の建物建設に伴う造成で破壊されたと考えられる。ちなみに、絵図（安里2013・平良1994）や写真（首里城復元期成会ほか1987）では階段の両端に石積みが確認されているが、今回までに検出されたのは東側のみである。

上記の遺構は基本的に一連の施設と捉えられ、改変や修理があったとしてもそれほど時期差はないと思われる。構築年代については、前述したように遺物の出土がなかったため判然としないが、隣接する維世門北地区の成果から15～17世紀頃と考えられる。



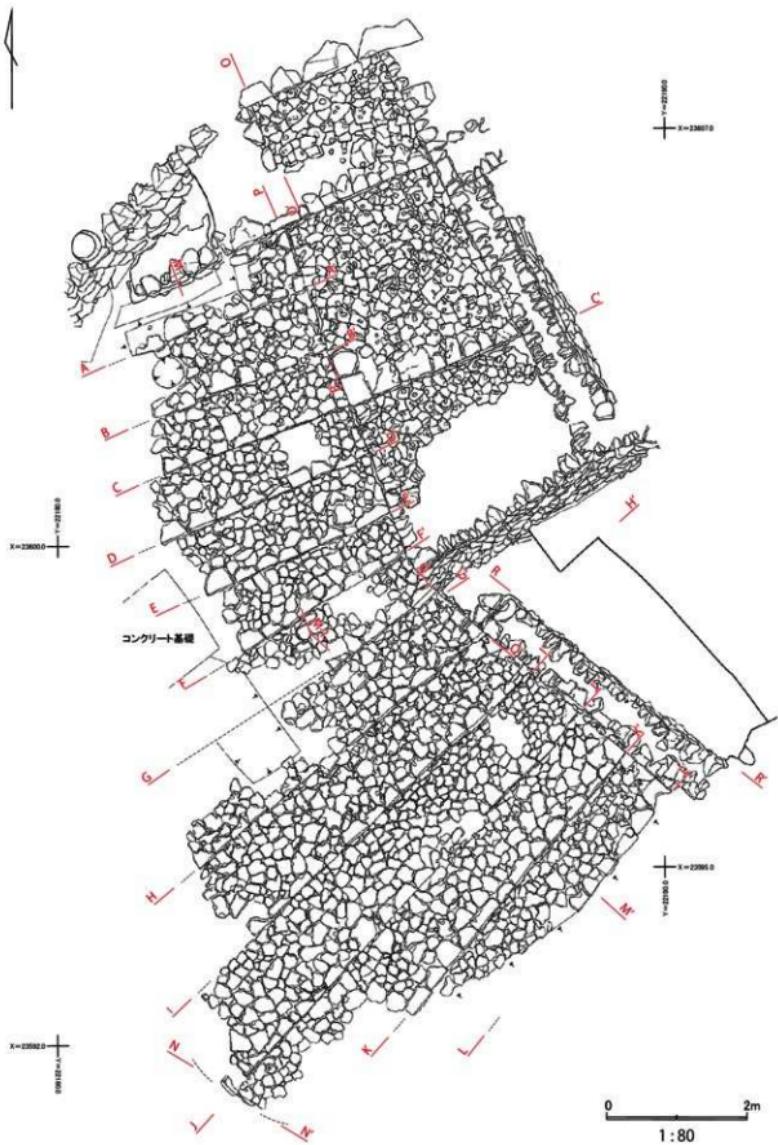
第11図 美福門燈道地区の位置



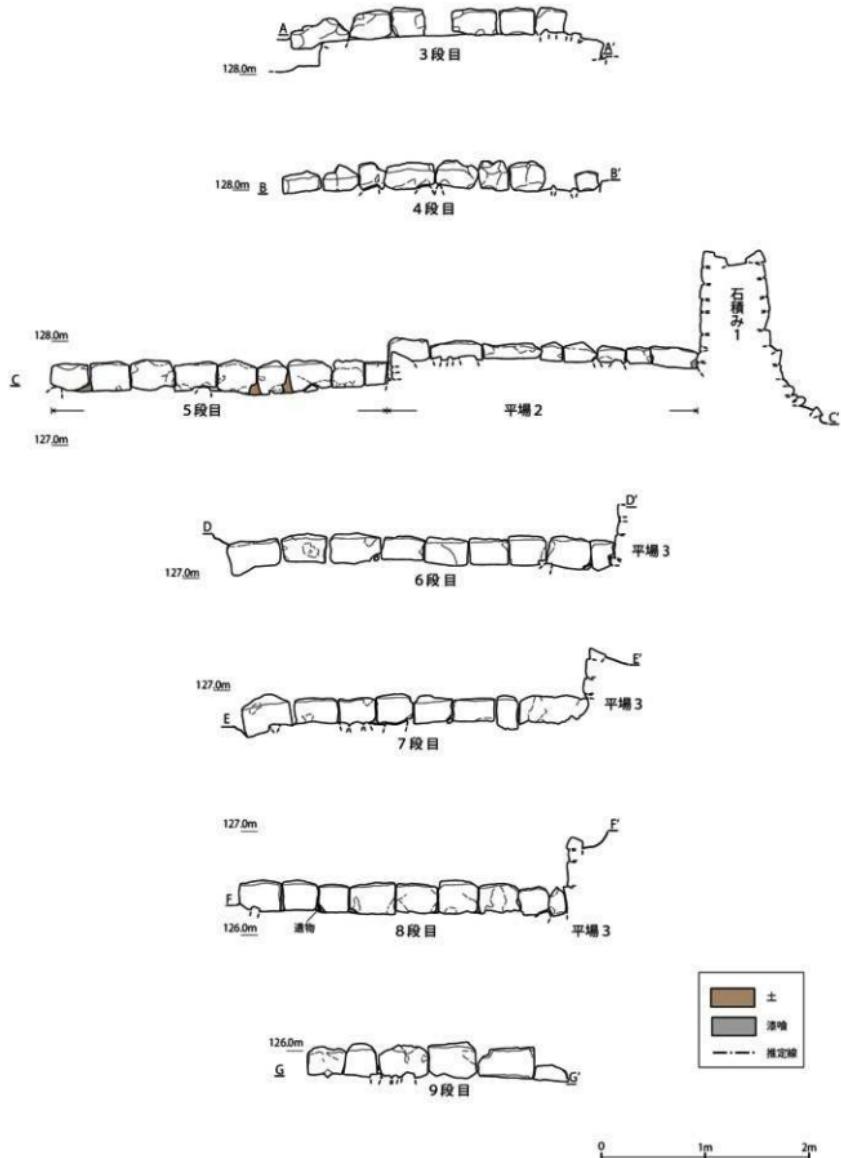
第12図 平面図1 崇平成30年度検出範囲(墨部)



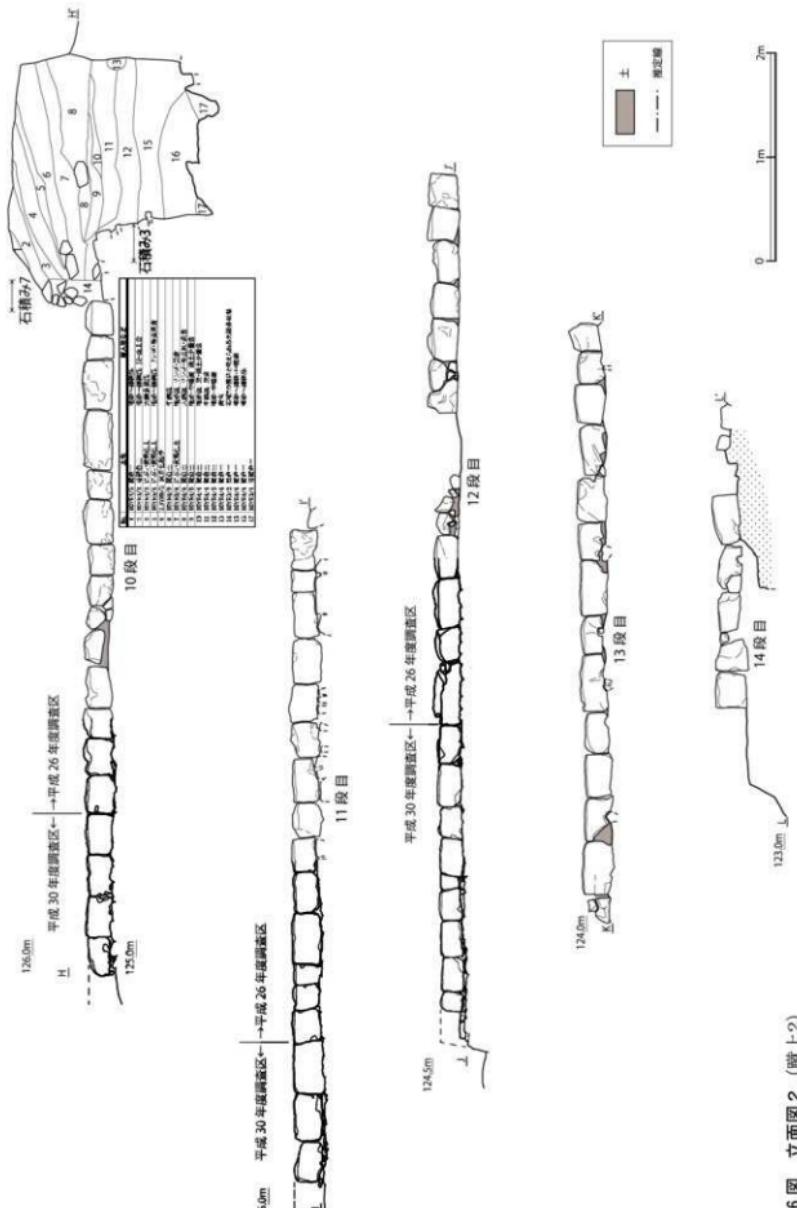
第13図 平面図2(オルソ画像)

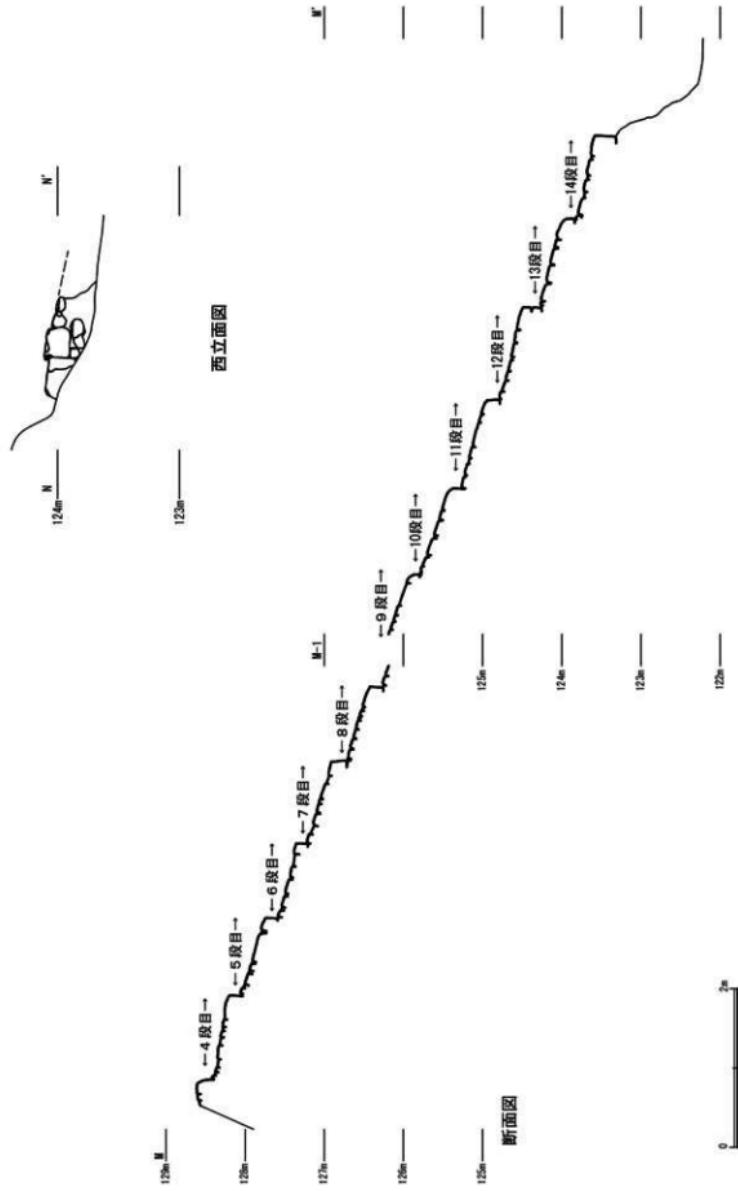


第14図 平面図3(立面図・断面図ライン入り)



第15図 立面図1（地上1）





第17圖 立面圖3（階段西側）斷面圖



第 18 図 立面図 4 (階段東側・東側石積み)

## 第4章 総括

以上、平成30年度に実施した首里城跡美福門礎道地区的発掘調査成果について報告した。本章では今一度それらを整理するとともに、若干の考察と今後の課題を述べる。

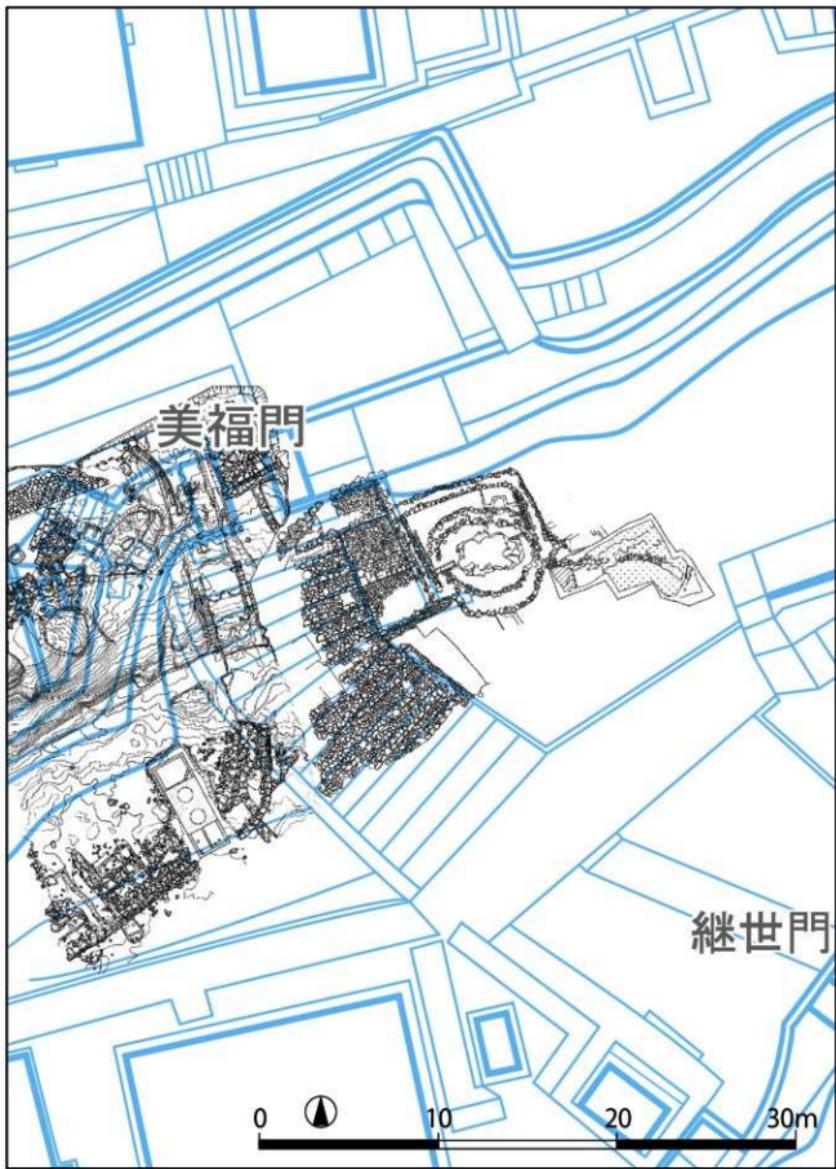
### 1 遺構について

今回の調査で階段を検出したことにより、調査区の東西に隣接する二階殿地区や繼世門北地区の調査成果と合わせて、美福門一帯の様相を全て把握することができた。この階段は、首里城内の城門に取り付く階段の中でも最大の規模を誇るもので、首里城の復元整備に資する遺構であることはもちろん、美福門が古い時代の正門であったとの伝承を考えるうえでも重要な存在である。

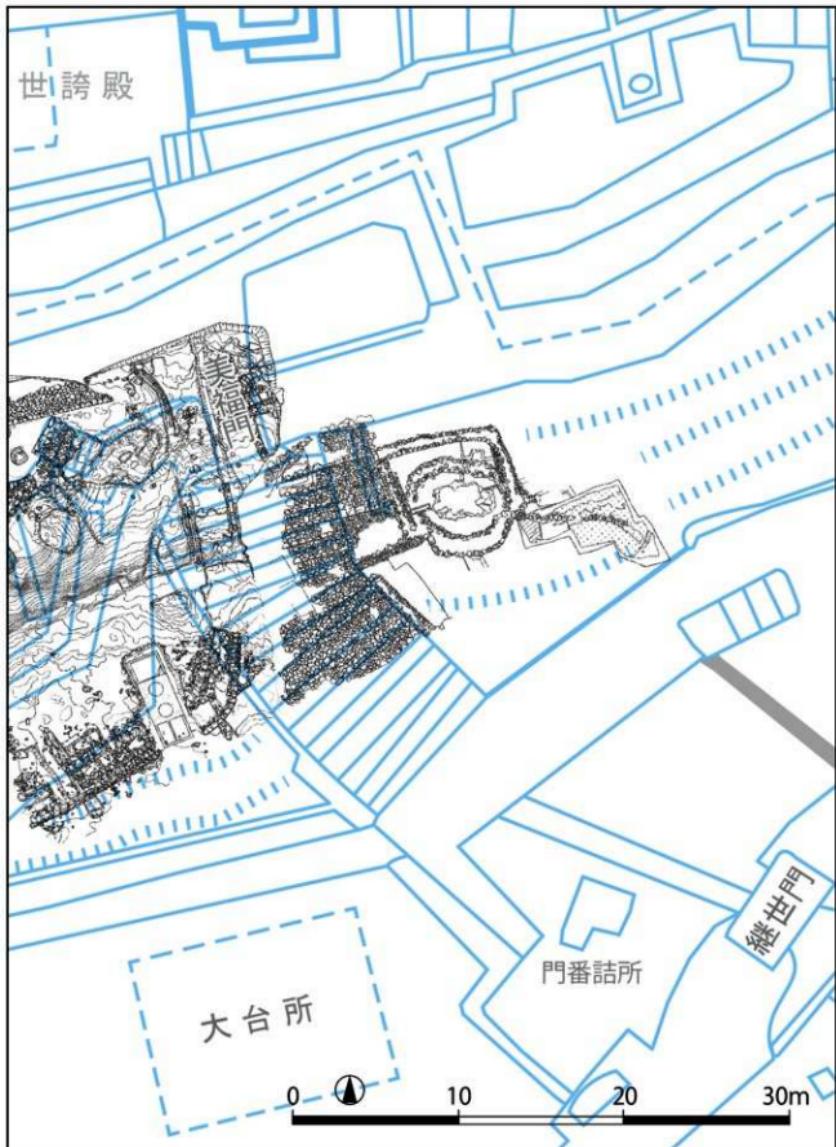
階段は西側と南側（15段以降）が破壊されており、旧琉球大学の造成工事が影響したと考えられるることは前述の通りであるが、正確な段数を復元するために遺構図を横内図や阪谷図と合成したのが第19・20図である。その結果、幅員は双方とも概ね一致するものの、段数や踏面の形態はいずれも遺構と一致しないことが判明した。階段の段数は横内図で16段、阪谷図で18段または19段を数える。遺構は14段まで残存しているが、横内図に合わせると残り2段で接地することになり、繼世門側との比高差を考慮するところの段数は想定し難い。対して阪谷図の段数は特に問題ないと思われるが、7段または8段に相当する踏面の平面形が三角形を呈しており、遺構の形態と異なっている。この状況から、階段については横内図・阪谷図の双方とも遺構を正確に図化したものではないことが理解される。ところで山本芳翠画の『琉球中城之東門』によると階段の段数は23段または24段となっているが、これだと遺構の残存する14段から約10段追加される計算であり、やはり繼世門側との比高差をみる限りこの段数も想定し難い。以上を勘案した結果、階段の段数は第21図に示すように19段が整合すると考えられ、実際の復元整備でもこの案が採用されている。

また、今回で美福門一帯の調査を全て終えたことにより、以前の成果を見直して再度検討することが可能となった。具体例として挙げられるのは二階殿地区検出の石積み（S R 6・8）で、かつては内郭城壁と評価していたが、本遺構の位置が横内図や阪谷図と整合しないこと、長さ20～30cm程度を測る粗加工の石材を積み上げる構築方法が他地域検出の城壁石積みと異なること、内面に相当する部分が確認されていないことから、内郭城壁とは別の性格を有すると考えられる。その鍵となるものが繼世門北地区検出の石積み（石積み2・9）で、階段及び美福門城壁の構築以前に遡る土留め石積みと判断しているが、この遺構は石材のサイズ・積み上げ方法・勾配が二階殿地区検出のS R 6・8と類似しているため、今回は両者を一連の遺構と捉えたい。つまり、第22図に示すように美福門一帯は土留め石積みを巡らせた後に、その上に美福門や階段を構築したと理解されるのである。なお、類似の遺構は東のアザナ北地区（沖縄県埋文2018b）でも確認されており、同じく土留め石積の上に内郭城壁を積み上げている。

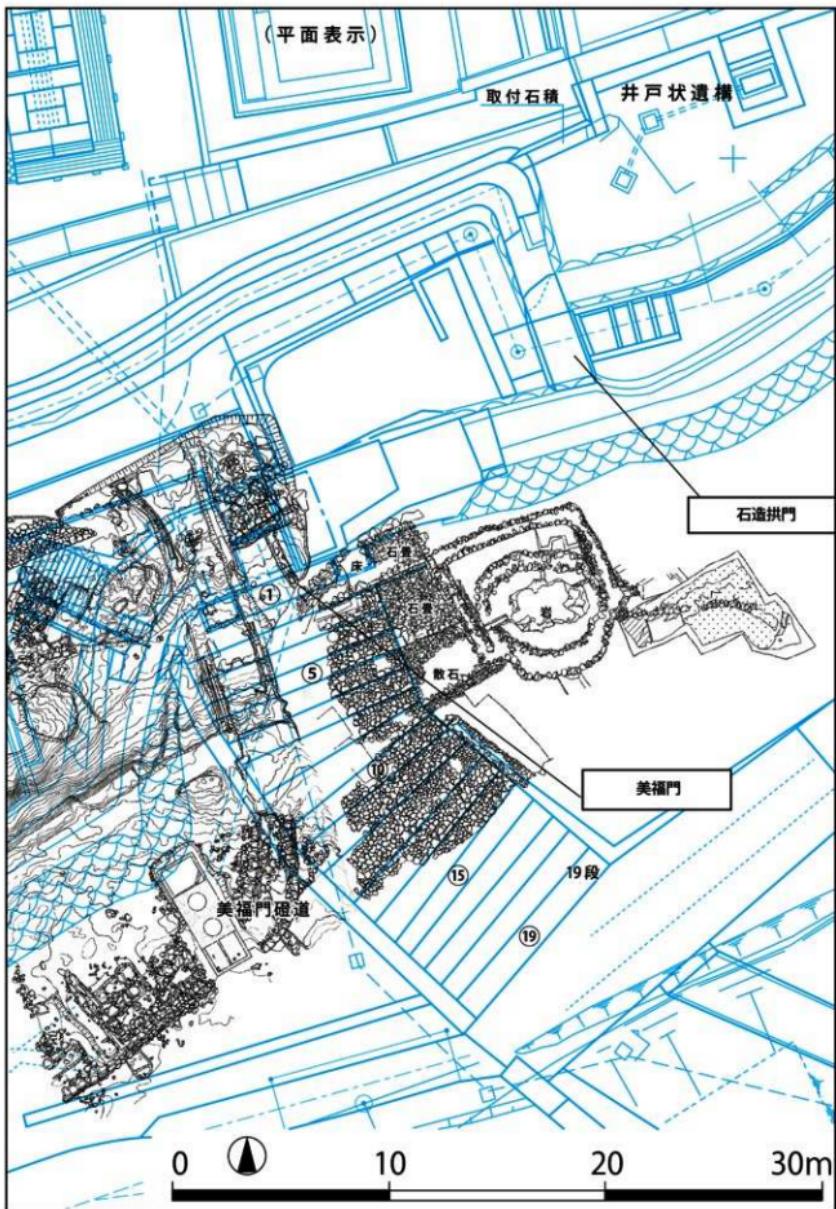
ちなみに、今回の資料整理で二階殿地区的調査成果を再検討したところ、美福門前階段及び西側石積みと思しき遺構の写真を確認した（図版12）。本遺構を繼世門北地区や美福門礎道地区的成果と照合すると、階段の7～9段と西側石積みに相当すると考えられ、また7段は西端まで確認され約6.8mの幅員を測る。これにより、階段の幅員が南東方向へ徐々に広がっていく状況が判明した。西側石積みは大きさ20～30cm前後の方形の石材を用いており、縱横複数個所に目地の通った状態でほぼ垂直に積み上げている。位置関係みると繼世門北地区検出の階段東側石積み（石積み3）に対応するものだが、石材のサイズや構築方法が異なっており、規模自体が石積み3に比して大きい。これは横内図・阪谷図・写真からも判断される。年代については判然としないが、階段及び東側石積みと一連の施設と理解されるため、同様に15～17世紀頃と考えられる。その他、西側石積みの後方にはS R 6・8がみられることから、これ



第19図 遺構図と横内図の合成

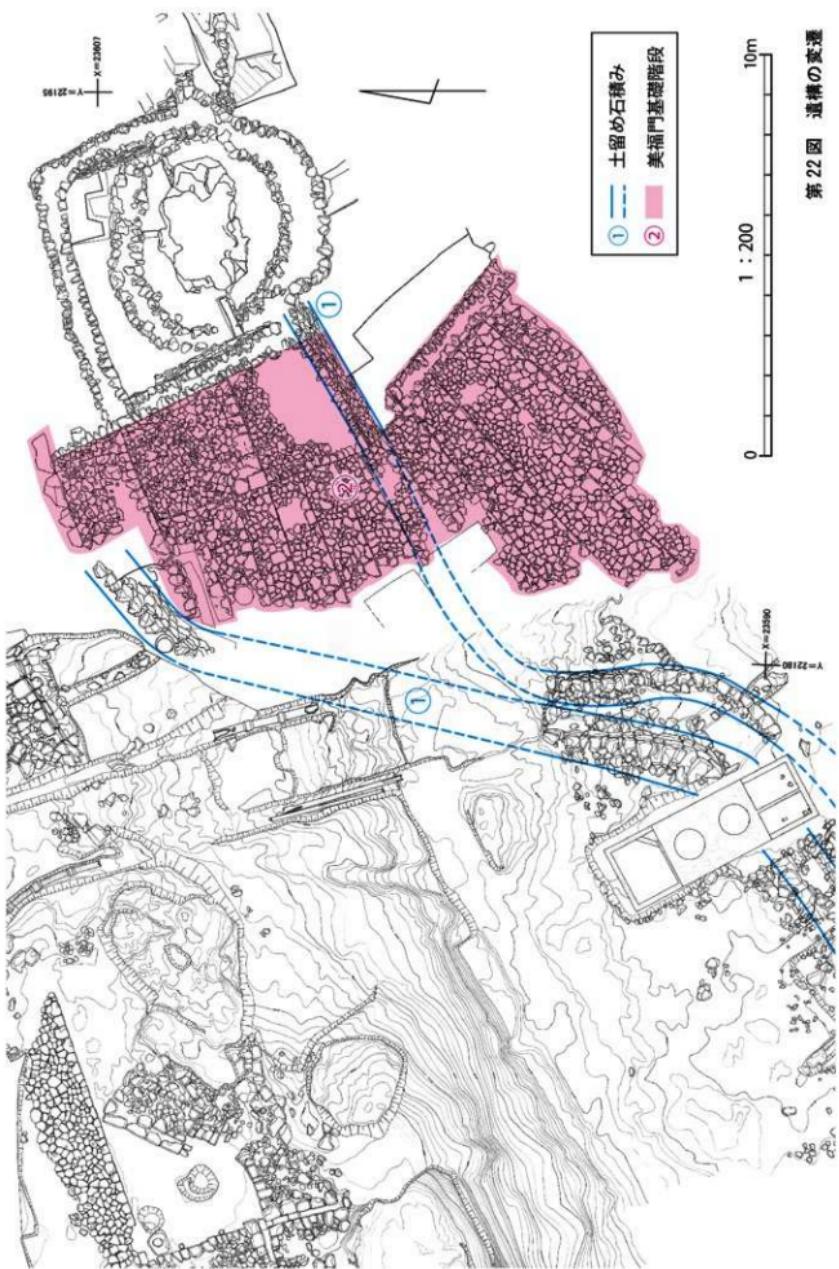


第 20 図 遺構図と阪谷図の合成



第21図 遺構図と整備設計図の合成

第22図 造構の変遷



らの成果は前述した美福門一帯における遺構の変遷として、土留め石積みの上に美福門や階段などを構築するという造成過程を証明するものとして興味深い。

## 2 今後の課題

首里城跡の発掘調査は、今回で一応の区切りを迎えた。最初は沖縄県日本復帰の昭和47(1972)年に開始された首里城城郭等復元整備に伴う遺構調査のみであったが、昭和60・61(1985・86)年度に実施された正殿地区発掘調査を経て、昭和62(1987)年度からは国営公園整備に先立つ発掘調査が始まり、平成3(1991)年度からは首里城周辺で県営公園整備に係る発掘調査も着手された。このうち、県営公園整備だけが現在も継続している。

首里城公園では、平成31(2019)年1月末で国営部分の整備事業が終了しており、同年2月からは有料区域の管理・運営を沖縄県に移管している。これまでの調査成果をまとめた報告書は国営・県営部分を合計すると30冊以上に及び、さらに現在資料整理途中のものもあるが、全ての成果を総合的に整理・検討する時期に来ていると思われる。大規模遺跡調査成果の総括は、県外では複数の事例が蓄積されているものの、県内ではまだ実施されていない。首里城跡でも、今回のように隣接地区を含めて遺構を評価した事例は多少あるが(沖縄県文化課1995、沖縄県埋文2010・2013a・2013b・2014)、各地の調査成果を全体的に総括する試みは実施されていない。その大きな要因は、これまで首里城跡の発掘調査が主体や目的の異なる3つの事業で別々に進められてきたことによるものであろうが、今後首里城跡の総括報告を目指した作業が開始され、それに伴い成果の再検討及び再評価が進展すれば、首里城の歴史や変遷がより明らかになることにつながり、これからも首里城公園の整備・活用にも大きく寄与できるものと考えられる。今回の報告書がその一助となれば幸いである。

## 引用・参考文献

- 安里進 2013「首里王府の重要施設絵図調整事業」『首里城研究』No.15 首里城公園友の会
- 新垣力 2013「首里城跡の考古学研究—近年の発掘調査成果を中心に—」『第6回鹿児島県考古学会・沖縄考古学会合同学会研究発表会資料集 鹿児島・沖縄考古学の最新動向』鹿児島県考古学会・沖縄考古学会
- 新崎盛彦 1956『思出の沖縄』新崎先生著書出版記念会
- 池宮正治 1995『南島文化叢書 17 琉球古語辞典 混効駿集の研究』第一書房
- 池谷望子・内田晶子・高瀬恭子 2005『朝鮮王朝実録 琉球史料集成【訳注篇】』榕樹書林
- 泉武 2016『沖縄民俗ノート(13) 首里城跡正殿1期をめぐる議論』『博古研究』第51号 博古研究会
- 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重(編) 1972『琉球史料叢書 第一巻』東京美術
- 伊從勉 2010「第五章 遺構からみる古琉球の首里城」『沖縄県史 各論編 第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会
- 氏家宏・兼子尚知 2006「那覇及び沖縄市南部地域の地質」『地域地質調査報告(5万分の1地質図幅)』独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
- 宇仁義和・当山昌直・岸本弘人 2014「R. C. アンドリュースが1910年に撮影した那覇の写真」『沖縄史料編集紀要』第37号 沖縄県教育委員会
- 沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部(編) 1987『国営沖縄記念公園首里城地区基本計画』
- 沖縄県教育庁文化課(編) 1984『評定所本 混効駿集』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課(編) 1985『金石文—歴史資料調査報告書V-』沖縄県文化財調査報告書第69集 沖縄県教育委員会

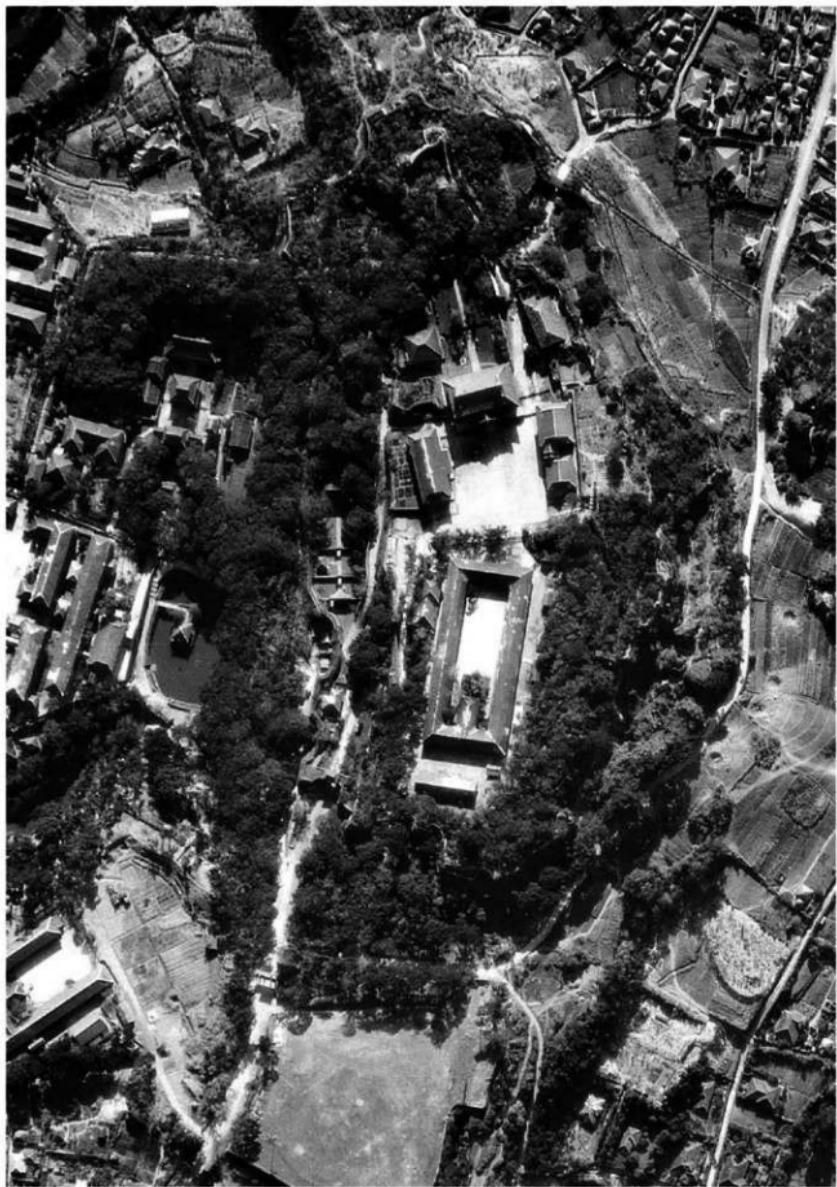
## 員会

- 沖縄県教育庁文化課（編） 1991『首里城跡 首里城正殿跡の遺構調査』同第 107 集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課（編） 1995『首里城跡 南殿・北殿跡の遺構調査報告』同第 120 集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課（編） 1988『首里城跡 御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告』同第 133 集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課（編） 2001『世界遺産 琉球王国のグスク及び関連遺産群』「琉球王国のグスク及び関連遺産群」世界遺産登録記念事業実行委員会
- 沖縄県立博物館・美術館（編） 2009『琉球絵画展～琉球王朝から近代までの絵画～』沖縄文化の杜
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2001『首里城跡一下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡 発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 3 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2002『首里城跡－繼世門周辺地区発掘調査報告書一』同第 9 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2003『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書一』同第 14 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2004『首里城跡－東のアザナ地区発掘調査報告書一』同第 20 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2005a『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書一』同第 28 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2005b『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書一』同第 29 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2006a『首里城跡－淑順門地区発掘調査報告書一』同第 33 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2006b『首里城跡－御内原地区発掘調査報告書一』同第 34 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2007a『首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書一』同第 44 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2007b『首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書一』同第 45 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2008『首里城跡一下之御庭首里森御嶽地区発掘調査報告書一』同第 47 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（I）一』同第 54 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2011『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（III）一 平成6年度調査の遺構編』同第 56 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2013a『首里城跡－淑順門西地区・奉神門埋夷地区発掘調査報告書一』同第 68 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2013b『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（2）一』同第 69 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2014『首里城跡－淑順門東地区発掘調査報告書一』同第 72 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2015『首里城跡－大台所・料理座地区周辺発掘調査報告書一』同第 78 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2016『首里城跡－正殿地区発掘調査報告書一』同第 82 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2017『首里城跡－御内原東地区発掘調査報告書一』同第 88 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2018a『首里城跡－繼世門北地区発掘調査報告書一』同第 97 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2018b『首里城跡－東のアザナ北地区発掘調査報告書一』同第 98 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2019a『令和元年度企画展 発掘調査速報 2019』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2019b『第 79 回文化講座 発掘調査速報 2019』
- 沖縄考古学会（編） 2018『沖縄考古学会 2018（平成 30）年度研究発表会資料集 古都首里を掘る』
- 沖縄タイムス社（編） 2019『報道写真集 首里城』
- 球陽研究会（編） 1974『沖縄文化史料集成 5 球陽 読み下し編』角川書店
- 久手堅憲夫 2000『南島文化叢書 22 首里の地名—その由来と縁起—』第一書房
- 宮内庁三の丸尚蔵館（編） 2001『明治美術再見IV 記録の芸術 山本芳翠とその時代 三の丸尚蔵館企画展図録No.23』
- 財団法人菊葉文化協会
- 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室（編） 2003『沖縄県史ビジュアル版 12 古琉球① 古地图にみる琉球』沖縄県教育委員会
- 史跡首里城跡整備委員会（編） 1988『史跡首里城跡整備基本構想』沖縄県教育委員会

- 島袋盛敏（編） 1964『琉歌大觀』沖縄タイムス社
- 首里城研究グループ（編） 1997『首里城入門 その建築と歴史』ひるぎ社
- 首里城公園基本計画調査委員会（編） 1984『首里城公園基本計画調査報告書』沖縄県土木建築部
- 首里城復元期成会・那覇出版編集部（編） 1987『写真集 首里城』那覇出版社
- 角田清美 2014「沖縄島・首里城と周辺地域の古井戸」『専修人文論集』第94号 専修大学学会
- 平良啓吾 1994「沖縄県首里旧城園」について『首里城研究』No.1 首里城公園友の会
- 高良倉吉 1988「首里城正殿に関する建築史年譜」『沖縄県立博物館紀要』第14号 沖縄県立博物館
- 高良倉吉 1996「第四節 琉球王国成立期の首里城に関する覚書」「前近代における南西諸島と九州—その関係史的研究」  
多賀出版
- 高良倉吉 2012「再先島役人の上国に見る首里城」日本東洋文化論集第18号 琉球大学法文学部
- 高階絵里加 1998「山本芳翠の沖縄訪問に関する試論」『美術史』第144冊 美術史學會
- 内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所（編） 2013a『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』
- 内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所（編） 2013b『国営沖縄記念公園整備・管理運営プログラム』
- 野々村孝男 1999「首里城を救った男 阪谷良之進・柳田菊造の軌跡」ニライ社
- 古川博恭・高里良政 1986「三、地形・地質」『那覇市歴史地図―文化財悉皆調査報告書一』那覇市教育委員会
- 法政大学沖縄文化研究所（編） 2014『沖縄研究資料 29 琉球沖縄本島取調書』
- 外間守善（校注） 2015『ワイド版岩波文庫 390 おもうさうし（上）』岩波書店
- 真栄平房敬 1988「首里城内の生活と儀礼」『窟徳忠先生沖縄調査二十年記念論文集 沖縄の宗教と民俗』第一書房
- 真栄平房敬 1997『首里城物語』ひるぎ社
- 宮城栄治 1996「古都首里的まちづくりに向けて 歴史的変遷の検証—1（「首里市制10周年記念誌」に見える明治以降の  
変遷）」『首里城研究』No.2 首里城公園友の会
- 山崎博士古稀祝賀會（編） 1941『山崎博士の演説と文章』
- 甦る首里城と復元編集委員会（編） 1993『首里城復元記念誌 甦る首里城 歴史と復元』首里城復元期成会
- 琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育庁文化課（編） 1994『琉球国絵図史料集 第三集一天保国絵図・首里古地図  
及び関連史料一』沖縄県教育委員会
- 琉球新報社（編） 2019『甦れ！ 首里城 報道写真と記事でたどる歴史』
- 琉球大学二十周年記念誌編集委員会（編） 1970『琉球大学二十周年記念誌』琉球大学



図版1 首里城跡空撮写真1（2010年国土地理院撮影）

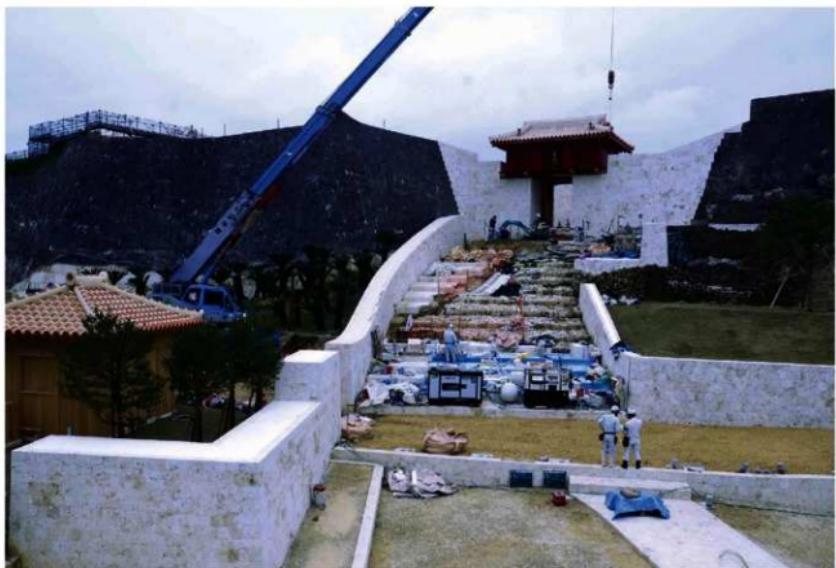


図版2 首里城跡空撮写真2（1945年4月2日米軍撮影 CV20-103-63）

※沖縄県教育庁文化財課史料編集班所蔵



3-1 調査区近景（平成30年6月25日）※南より



3-2 調査区遠景（平成31年1月8日）※南より

図版3 調査区近景・遠景



美福門前階段 崇南西より

図版4 遺構検出状況1



5-1 美福門前階段・遺構敷設状況 崇南西より



5-2 美福門前階段・西側侧面 崇西より

図版5 遺構検出状況2



6-1 美福門基礎（石列2）・美福門前階段（階段1）・御嶽 崇南より



6-2 美福門基礎（石列2）・美福門前階段（階段1）・御嶽 崇南西より

図版6 平成26年度遺構検出状況1（繼世門北地区1）



7-1 土留め石積み（石積み9） 崇東より



7-2 美福門基礎及び階段（石列2、階段1）・土留め石積み（石積み9）と復元城壁 崇西より  
図版7 平成26年度遺構検出状況2（繼世門北地区2）



8-1 美福門前階段（階段1）・東側石積み（石積み3） 崇東より



8-2 美福門前階段（階段1）東側侧面 崇東より

図版8 平成26年度遺構検出状況3（繼世門北地区3）



9-1 土留め石積み（SR 6・8）と美福門石積み（SR 1） 崇南より



9-2 土留め石積み（SR 6・8） 崇南より

図版9 平成9年度遺構検出状況1（二階殿地区1）



10-1 美福門周辺 崇東より



10-2 美福門一帯 崇北より

図版10 平成9年度遺構検出状況2（二階殿地区2）



11-1 美福門石積み（SR 1）※南より



11-2 美福門石積み（SR 1）※東より

図版 11 平成9年度遺構検出状況3（二階殿地区3）



12-1 美福門前階段及び西側石積み 崇南より



12-2 美福門前階段及び西側石積み 崇東より

図版12 平成9年度遺構検出状況4（二階殿地区4）

# 報告書抄録

ふりがな	しゅりじょうあと							
書名	首里城跡							
副書名	美福門確道地区発掘調査報告書							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第103集							
編著者名	新垣 力							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7 TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754							
発行年月日	2020年2月28日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
首里城跡 (美福門確道地区)	沖縄県 那覇市 首里当蔵町 3丁目1番	47201		26° 13' 2"	127° 43' 11"	20190107 ~ 20190116	30m <sup>2</sup>	国営沖縄記念公園(首里城地区) 整備に伴う遺構確認調査
所取遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
首里城跡 (美福門確道地区)	城跡	グスク時代～近代	階段	なし			美福門から延びる階段(確道)を確認	
要約	<p>今回の調査区は、平成9年度調査区の二階殿地区と平成26年度調査区の継世門北地区の間に位置する。過去の調査では、尚巴志王代(1422～1439年)創建とされる美福門及びそこから南東方向に延びる階段を検出していたが、今回の調査でも階段の一一部を確認した。本遺構は確道とも称されるもので、幅広の踏面と高い蹴上という特徴的な形態を有する。継世門北地区で1～14段を把握していたが、今回は10～13段の西側延長範囲に加え、12・13段の西端で階段の側面と思われる部分も確認した。これにより、同所における階段の幅員や、琉球石灰岩の基盤層を階段状に加工しその上に平滑な石材を敷設するという構築方法などが判明した。年代については、遺物の出土がなかつたため判然としないが、隣接する継世門北地区の成果から15～17世紀頃と考えられる。</p> <p>また、今回の調査で美福門及び一帯の全容が把握されたため、過年度の成果を含めて一体的に検査することにより、当該地区における遺構や土地利用の変遷の一端を窺い知ることも可能となった。</p>							

---

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第103集

## 首 里 城 跡

—美福門礎道地区発掘調査報告書 —

発行日 令和2(2020)年2月28日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

T E L : 098-835-8751・8752

印 刷 丸正印刷株式会社

〒903-0211 沖縄県西原町字小那覇1215

---